



日本水大賞

JAPAN WATER PRIZE

水の惑星—地球を形容するのにこれほど適した言葉はないでしょう。水は自然界を循環し、地球上あらゆる生物の生命を育み、生存を支え、汚染を浄化してきました。特に日本においては古来より美しい水を誇り、私たちはその恩恵に浴してきました。私たちはこの美しい水を次世代の子どもたちに受け継ぐことができるでしょうか……。

平成10年6月、安全な水、きれいな水、おいしい水にあふれる21世紀の日本と地球を目指し、水循環の健全化に寄与することを目的として、日本水大賞顕彰制度委員会（委員長 東京大学名誉教授、国連大学上席顧問 高橋 裕氏）が設立され、事務局が公益社団法人日本河川協会内に置かれました。第7回から日本水大賞委員会に名称を変更し、第12回より委員長は日本科学未来館館長で宇宙飛行士であった毛利衛氏となり現在委員13名及び特別委員6名で構成されております。

また、第17回より国土交通省が主催者として協働しております。

日本水大賞委員会は、水循環の健全化に寄与する個人、諸団体の地道な研究活動を応募、顕彰し、広く全国に紹介、啓発するための「日本水大賞」を主催し、第1回日本水大賞の表彰式・受賞活動発表会が平成11年3月に秋篠宮同妃両殿下(当時)のご臨席を仰ぎ盛大に開催されました。また秋篠宮皇嗣殿下におかれましては、平成17年5月より日本水大賞委員会名誉総裁にご就任されております。

第1回の日本水大賞は大賞の他大臣賞として建設大臣賞、国務大臣環境庁長官賞（当時）が贈られました。その後第3回（平成13年5月）から厚生労働大臣賞、第6回（平成16年6月）から農林水産大臣賞及び文部科学大臣賞、そして第8回からは経済産業大臣賞が加わり、水環境行政に関わる全ての6省から贈られるまでになりました。また、第4回（平成14年5月）からはスウェーデンで開催される青少年を対象とした権威ある国際コンテスト、ストックホルム青少年水大賞に参加する日本代表の選考を兼ねた日本ストックホルム青少年水大賞（青少年研究活動賞から改称）が設けられました。国際コンテストでは、2004年に沖縄県立宮古農林高等学校が始めてグランプリを獲得し、2020年には青森県立名久井農業高等学校が2度目のグランプリを獲得しました。

今年で第24回となる日本水大賞は、これまで応募総数、延べ4,493件（日本水大賞4,128件、日本SJWP365件）に達し、大賞以下表彰された個人、団体は、延べ365件（日本水大賞317件、日本SJWP48件）を数えます。後援をいただくのは、水循環政策本部、外務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省の他、関係34団体。協賛企業は7社1団体であり、日本における水環境問題を研究活動する全ての個人、団体を対象とした唯一の賞として、多くの活動される方々の励み、目標となり、広く国民に水循環の健全化の重要性を啓発する機会として発展を遂げてきました。



対象範囲

(1) 対象となる活動の内容（活動分野）

水循環系の健全化に寄与すると考えられる活動で、以下のような分野における諸活動（研究、技術開発を含む）を対象とします。

①水防災：

- ・防災教育、住民避難の円滑化への取組み
- ・水防災に対する安全性の向上に資する技術の開発・普及等

②水資源：

- ・水を大切に取る取組み、山や川などの水源を大切に取る取組み等

③水環境：

- ・川や湖沼、海などの水をきれいにする取組み、水辺や水のある地域づくりを行う活動
- ・水にかかわる体験活動、環境学習等
- ・生き物の保護や生物多様性の保全に資する活動（「水循環系の健全化」の視点が含まれるものに限る）

④水文化：

- ・水や川、湖沼や海などに対する敬意と親愛を高める活動
- ・水や川、湖沼や海などの文化を創り、広める活動（芸術、文学を含む）、地域における水文化の発掘や普及等

⑤復興：

- ・上記①から④に該当する活動のうち、地域の復興の視点から実施されるもの

※その他、上記①～⑤に関する国際的な連携・技術協力・学会活動

(2) 対象となる活動主体

水循環系の健全化に寄与すると考えられる活動で、以下のような方々が実施する諸活動を対象とします。
なお、個人、法人、グループの種別、年齢、職業、性別、国籍等を問いません。



日本水大賞の内容

対象となる活動の中から、優れたものに対して、以下の賞を授与し、広く公表します。

①大賞【グランプリ】（賞状・副賞 200 万円）

水循環の健全化を図る上で、活動内容が幅広くかつ社会的貢献度が高く、総合的見地から特に優れたものに対して授与します。

②大臣賞【国土交通大臣賞】【環境大臣賞】【厚生労働大臣賞】【農林水産大臣賞】【文部科学大臣賞】

【経済産業大臣賞】（賞状・副賞 50 万円）

各省の行政目的に関係の深いものの中から、特に優れたものに対して授与します。

③市民活動賞【読売新聞社賞】（賞状・副賞 30 万円）

市民活動の中から、特に優れたものに対して授与します。

④国際貢献賞（賞状・副賞 30 万円）

活動の範囲や効果が国際的であり、人・文化・技術の日本との交流も含め、大きな功績をあげていると考えられるものに対して授与します。

⑤未来開拓賞（賞状・副賞 10 万円）

国内外を問わず水分野における新たな展開を対象とし、特に優れたものに対して授与します。

⑥審査部会特別賞（賞状・副賞 10 万円）

活動がユニークなものなど、審査部会において特に表彰に値すると判断されたものに授与します。

⑦日本ストックホルム青少年水大賞（賞状・副賞 20 万円及び国際コンテスト参加の渡航、滞在費用）

20 歳以下の高校生または同等の学校に在籍する生徒又はその団体での研究活動から優れたものに授与します。
その他、審査部会で表彰に値すると判断されたものは、委員会での承認を経て、優秀賞及び審査部会特別賞が授与されます。

第24回日本水大賞 各賞（応募総数131件）

各賞	活動主体	都道府県	活動の名称	活動主体の名称
大賞	団体	福岡県	アフガン・「緑の大地計画」 — 伝統に学ぶ灌漑・水利事業	ベシャワール会／ PMS(平和医療団・日本)
国土交通大臣賞	団体	福岡県	昭和28年筑後川大水害の伝承活動	筑後川まるごと博物館運営委員会
環境大臣賞	学校	群馬県	尾瀬国立公園や片品川源流域をフィールドにした水環境学習	群馬県立尾瀬高等学校 自然環境科
厚生労働大臣賞	団体	山梨県	多摩川源流での水源の森再生プロジェクト	特定非営利活動法人 多摩源流こすげ
農林水産大臣賞	団体	栃木県	渡良瀬川源流域の森再生プロジェクト	特定非営利活動法人 足尾に緑を育てる会
文部科学大臣賞	学校	滋賀県	安曇川流域資源を活用した起業家精神育成の推進	大津市立葛川小・中学校 KCL プロジェクト
経済産業大臣賞	企業	大分県	排水クローズドによる水資源循環型システムの構築	大分キヤノンマテリアル 株式会社
市民活動賞	団体	千葉県	水災害への意識を高める市民防災まちづくり塾	市民防災まちづくり塾
国際貢献賞			該当ナシ	
未来開拓賞	団体	滋賀県	びわ湖の固有種ビワオオウズムシから見つめる地球環境	びわ湖トラストジュニアドクター 育成塾ビワオオウズムシ調査隊
審査部会特別賞	個人	埼玉県	新潟県魚野川流域を中心とした川の文化の記録	戸門 秀雄
審査部会特別賞	企業	大阪府	災害被災地域における水道施設の早期復旧活動	理水化学株式会社

第24回日本水大賞委員会 委員名簿

名誉総裁 秋篠宮皇嗣殿下		
役 職	氏 名	所 属・職 名
委員長	毛利 衛	日本科学未来館 名誉館長
副委員長	松田 芳夫	公益社団法人日本河川協会 会長
委 員	赤星 たみこ	漫画家・エッセイスト
委 員	浅枝 隆	埼玉大学 名誉教授
委 員	大垣 眞一郎	東京大学 名誉教授
委 員	岡田 光正	広島大学 名誉教授
委 員	岡村 隆吉	一般社団法人日本経済団体連合会 廃棄物・リサイクル部会長代行
委 員	櫻野 泰則	一般社団法人日本建設業連合会 環境委員長
委 員	進士 五十八	福井県立大学 学長
委 員	谷田 一三	大阪府立大学 名誉教授
委 員	名執 芳博	特定非営利活動法人日本国際湿地保全連合 相談役
委 員	前木 理一郎	(株)読売新聞東京本社 常務取締役編集局長
委 員	村田 和夫	(株)建設技術研究所 取締役会長
特別委員	山田 邦博	国土交通事務次官
特別委員	中井 徳太郎	環境事務次官
特別委員	吉田 学	厚生労働事務次官
特別委員	枝元 真徹	農林水産事務次官
特別委員	義本 博司	文部科学事務次官
特別委員	多田 明弘	経済産業事務次官

第 24 回日本水大賞 活動概要

【大賞】(副賞 200 万円)

活 動 主 体	ペシャワール会／ PMS(平和医療団・日本)
活 動 名 称	アフガン・「緑の大地計画」 — 伝統に学ぶ灌漑・水利事業
活動の背景・動機	<p>気候変動により 2000 年以降、アフガン全土で深刻な干ばつが進行するなか、十分な食べ物と清潔な飲み水がないために多くの生命が危機にあった。飢えと渴きは薬では治せない状況を前に「百の診療所より、一本の用水路を」と考え、水資源確保事業を開始した。</p> <p>洪水と渇水を繰り返すアフガニスタンにおいて、安定した取水を保障する灌漑用水路事業は、人々が生きていくための希望の灯となるとともに、持続可能な復興のモデルを示している。</p>
活 動 の 概 要	<p>アフガニスタンでは 2000 年以降、干ばつが深刻化している。土漠化した農地復旧のため 2002 年、中村医師は総合農村復興支援計画「緑の大地計画」を立案し、翌年より用水路建設を開始した。</p> <p>工事にあたっては、土砂吐き・洪水吐きを伴う斜め堰による取水堰など、日本の伝統的工法を採用した。これらは現地の人々による建設・維持が可能な工法であり、工事に当たっては現地での雇用創出も図られた。</p> <p>これらにより、全長 27km のマルワリード用水路をはじめ、現在までに 11 箇所取水堰を建設し、年間を通じて 16,500ha の耕地に安定した水量確保が図られ、65 万人の生活を保障している。</p>

【国土交通大臣賞】(副賞 50 万円)

活動主体	筑後川まるごと博物館運営委員会
活動名称	昭和 28 年筑後川大水害の伝承活動
活動の背景・動機	<p>筑後川流域は梅雨期の豪雨により毎年のように浸水被害が発生している。近年においても、平成 30 年から令和 3 年にかけて久留米では 4 年連続で 5 回の浸水被害に見舞われている。</p> <p>昭和 28 年に発生した大災害から 68 年が経過し、当時の記憶を持つ人々は年々減り、当時の写真もその場所や状況が不確かなことが多くなっている。実体験者が健在なうちに、これらの記憶を掘り起こし、水害の怖さや日頃からの備えの大切さを学ぶことと、災害に対する記憶の風化防止は緊急で必要なことである。</p>
活動の概要	<p>平成 15 年に筑後川防災施設くめウスが開館されたのを機に「昭和 28 年筑後川大水害写真展」、「昭和 28 年大水害証言発表会」が始まり、18 年になる。5 年前からは公民館等においてもこれらを開催し、子供向け防災教室も実施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 昭和 28 年筑後川大水害写真展:収集した 2000 枚以上の災害写真をもとに、流域内外で 63 回の企画展示を行い、7 万人以上の来場を得た。本写真展の特色は、来場者による写真に対する補足説明や感想が付箋紙として写真に貼られていることである。同時に「聞き取り人」を配し、写真を見ている体験者から体験談の聞き取りも行っている。これらを通じ、知られていなかった写真の情報が明らかになり、災害体験の埋没を防いでいる。 ・ 昭和 28 年大水害証言発表会:事前募集と、当日会場での飛び入りにより、毎回 5~10 人程の発表者による災害の証言発表会である。26 回の証言会を通じ延べ 150 人程の発表と 600 人以上の参加者を得た。「聞き語り部」が体験者から聞いた各地の大水害の様子をスライド写真により詳しく解説する活動も行っている。 <p>災害を知らない世代に水害の怖さや防災の大切さを伝え、災害が多発している筑後川流域住民が過去の災害の記憶を取り戻し、後世に伝える機会を提供している。</p>

【環境大臣賞】(副賞 50 万円)

活 動 主 体	群馬県立尾瀬高等学校 自然環境科
活 動 名 称	尾瀬国立公園や片品川源流域をフィールドにした水環境学習
活動の背景・動機	<p>ラムサール条約の登録湿地である尾瀬の豊かな水環境を将来にわたって保全していくため、毎年の水質調査を通じ水質の変化の調査が必要。</p> <p>首都圏の水がめでもある片品川の源流域である尾瀬において、近年、世界的な問題となっているマイクロプラスチックについても変化を見守ることが必要。地域の希少種の水生生物についても、適切な保全活動が必要である。</p>
活 動 の 概 要	<p>自然環境科は「自然との共生」を図ることのできる人づくりを目指し、体験活動を重視した環境教育を 20 年以上実施している。</p> <p>学校の立地を活かし、尾瀬国立公園、ブナの自然林が広がる武尊山「水源の森」等を舞台に授業や課外活動を通して調査研究や体験活動を行っている。</p> <p>尾瀬ヶ原水質調査を 20 年以上実施しているほか、武尊山等での自然環境調査、マイクロプラスチック調査、地域住民とともに行う希少種の保護活動などを行っている。</p> <p>尾瀬ヶ原のマイクロプラスチック調査では、廃棄物由来のマイクロプラスチックがほとんどないことを明らかにしたが、これは全国でもまれな結果である。</p> <p>一部の活動は、学校単独で行うことにとらわれず、積極的に外部と繋がり、協働的に進めることを意識している。</p>

【厚生労働大臣賞】(副賞 50 万円)

活 動 主 体	特定非営利活動法人 多摩源流こすげ
活 動 名 称	多摩川源流での水源の森再生プロジェクト
活動の背景・動機	<p>小菅村の山林は、100 年以上にわたり東京都の水源林としての機能を維持してきたが、村の人口減少と高齢化により手入れの行き届かない山林や耕地が増加している。</p> <p>近年の土砂災害や水害が多発する状況からも、水源林の整備は急務である。自然と共存する環境保全技術の継承や各地の源流での環境改善の流れを作ることが必要。</p>
活 動 の 概 要	<p>小菅村内の山林を活動地として、荒廃した状態から水源涵養機能を回復させる技術を学び、実践する講座を開講する。</p> <p>1泊2日の本講座を年4回程度、日帰り講座を年数回程度開講し村内に残る水源林や「わさび田」の石積みを通じて行われてきた山林の保全技術から山の見方と必要な施業を学ぶ。</p> <p>スギ・ヒノキの人工林から複層林へと導くことにより、「水源の森」の見本林を整備し、村民への普及を図り、名実ともに「源流の村」を目指す。</p> <p>源流域の水源涵養機能を回復し、下流域の水環境を改善することにより、上流域の森林や水環境への関心を醸成する</p> <p>本講座で学んだ受講生が各地域で実践することにより、水源の森環境再生を全国で継続的に行う流れを作っている。</p>

【農林水産大臣賞】(副賞 50 万円)

活動主体	特定非営利活動法人 足尾に緑を育てる会
活動名称	渡良瀬川源流域の森再生プロジェクト
活動の背景・動機	<p>荒廃裸地化し崩れ続ける山々を望みながらの緑化活動は、参加する人々に自然破壊の悲惨さや、破壊された自然を取り戻すことの困難さを実感させ、環境問題への意識が高まる。</p> <p>下流域の人々とともに活動することにより渡良瀬川と共に暮らした人々の生活を取り戻し、人と人を結びなおすことができる。</p> <p>産業発展の過程で破壊された自然を再生し、緑のダムの創造や水環境系の健全化に寄与する活動は極めて需要。</p>
活動の概要	<p>足尾の山の緑化活動を通じて、水環境系を中心とした環境問題に取り組み、自然環境の健全化ならびに地域社会の伸展に貢献する事を目的に活動している。</p> <p>毎年「春の植樹デー」、「夏の草刈りデー」、「秋の観察デー」を開催し、足尾町松木地区足尾砂防堰堤周辺において緑化活動を行っている。荒廃裸地化した2,500haのうち30haにおいて植樹を実施している。これまで25年間で延べ201,200名が植樹に参加し、265,132本の苗木を植えた。</p> <p>平成12年から毎年8月に「足尾グリーンフォーラム」を開催し、環境に関する講演会・シンポジウムを行うことにより、様々な課題の検討と併せ上下流域での参加者相互の交流を深めている。</p> <p>平成9年からは小中学生や団体を中心に体験植樹を実施している。参加団体は、年々増加し150団体前後に達した。</p> <p>平成17年からは「足尾環境資料室」を開設し、銅山や環境問題など約2,000点の資料を収集し、公開している。</p>

【文部科学大臣賞】(副賞 50 万円)

活 動 主 体	大津市立葛川小・中学校 KCL プロジェクト
活 動 名 称	安曇川流域資源を活用した起業家精神育成の推進
活動の背景・動機	<p>水源に近い山間の学校統廃合は進み、令和 2 年には滋賀県内最後のへき地小・中学校となった。小規模特認校として地域外から通学する子供たちのふるさとを想う心をはぐくむことは容易ではない。</p> <p>廃校の危機という難題に対する処方箋として、安曇川流域資源に目を向け、地域の水循環系を教育資源と捉えたカリキュラム開発に着眼した。水資源のイノベーションへの取り組みと、その地に根差した暮らしを考えることは親和性が高く、本校が存続している今だからできる挑戦である。</p>
活 動 の 概 要	<p>市内全域から児童生徒を受け入れる小規模特認校の認可を得た葛川小・中学校は、地域外からの児童生徒が半数を占めるようになり、一様でないふるさとを前提としたカリキュラム開発に着手した。</p> <p>地域おこしを総合的な学習の時間に位置付け、小中学校 9 年間の連続した学習を行い、教育推進の柱として、流域資源を活用した起業家精神「アントレプレナーシップ」の育成を推進している。</p> <p>地域を知ってもらい〈know〉、来てもらい〈come〉、住んでもらう〈Live〉活動、KCL プロジェクトにより安曇川がもたらす水の豊かさと流域資源を流域内外に発信している。</p> <p>プロジェクトの中で、天然染のアクセサリーを京都の大学生と共同開発することや地域に伝わる筏流しの再現などに取り組んでいる。</p>

【経済産業大臣賞】(副賞 50 万円)

活 動 主 体	大分キャノンマテリアル株式会社
活 動 名 称	排水クローズドによる水資源循環型システムの構築
活動の背景・動機	<p>水不足が世界的な問題となる中で、一番の原因は水質汚染。全ての人間が水は限りある資源だという認識を持ち、汚染対策に取り組んでいくことが必要。</p> <p>会社として水資源を守ることに、個人として何が出来るかということ、これらの問題を多くの人に伝えることが大切。</p> <p>排水クローズドシステムをはじめ、工場見学や環境出前授業、清掃活動を継続的に続けていくことはこれからも必要。</p>
活 動 の 概 要	<p>大分キャノンマテリアル杵築事業所では、工場廃水をすべて再利用する排水クローズドシステムを導入している。工場で発生した廃水(産業廃水)は、全て工場内で処理し、再生利用している。これにより、雨水以外の廃水は一滴も外部に放流することなく、廃水による水域の汚染防止に貢献している。</p> <p>生産で使用された廃水だけでなく、飲料、厨房、トイレの洗浄水等の生活排水も含めて、排水完全クローズドシステムで処理を行っている。</p> <p>平成 15 年以降、大分市、別府市、杵築市の小学生を対象に、座学と実験を組み合わせた内容からなる環境出前授業を実施している。</p> <p>工場見学では、クローズドシステムを案内する中で、汚れた水が最終的に再利用できるまで綺麗になる工程(変化)を身近に感じてもらうことで、水資源に対する意識の向上を図っている。</p> <p>平成 22 年より隣接する海岸や河川の他に、近隣の山や街中の清掃にも取り組んでいる。</p>

【市民活動賞】(副賞 30 万円)

活 動 主 体	市民防災まちづくり塾
活 動 名 称	水災害への意識を高める市民防災まちづくり塾
活動の背景・動機	<p>「東日本大震災」発生以来、平成 27 年 9 月鬼怒川決壊、平成 29 年 7 月九州北部豪雨、平成 30 年西日本豪雨、令和元年台風 19 号など多くの住民の命が失われ、家屋の被害も甚大になっている。</p> <p>激甚化する水災害に対し住民の正常性バイアスは未だに避難行動の遅れという形で表れている。</p> <p>今こそ住民一人ひとりの意識の改革が真に求められている。</p>
活 動 の 概 要	<p>かたりべ土屋信行氏と共に、市民向け水災害防災講座として NPO、町内会、住民防災組織、区役所、大学などと連携して以下の取り組みを実施している</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 防災講演会(280 回開催) 月 1~2 回の自主講座の他に、各団体からの要望に応じて開催。 ・ 避難体験キャンプ(12 回開催) ワークショップ方式で発災後の行動を体験。夜は防災テントで宿泊し、意見交換などを行う ・ 被災現場見学会(15 回開催) 関東各地の決壊現場、東日本大震災の被災現場、東京東部デルタ地域地盤沈下箇所などの現場で災害を迫体験する。 ・ 河川防災関連施設見学会(69 回開催) 上流のダム群、中流の遊水地、下流及び海岸部の高潮堤防等を見学する ・ 上下流住民交流会(9 回) 観光や農産品の購入、ふるさと納税などの方法で上流部の人々の協力に報いるきっかけづくり。

【未来開拓賞】(副賞 10 万円)

活 動 主 体	びわ湖トラストジュニアドクター育成塾ビワオオウズムシ調査隊
活 動 名 称	びわ湖の固有種ビワオオウズムシから見つめる地球環境
活動の背景・動機	<p>持続可能な開発目標である SDG's のゴール 14、15 は環境や生物多様性の保護に相当するが、1975 年から毎年 4 万種が絶滅するという状況になっている。</p> <p>この状況を改善するためには、一人一人の地球環境問題への意識を高めることが非常に重要。</p> <p>ビワオオウズムシを探索することで琵琶湖の環境を見つめ、そして地球環境を見つめる。</p>
活 動 の 概 要	<p>生息確認が難しくなった絶滅危惧種指定、琵琶湖固有種であり世界最大のプラナリアであるビワオオウズムシの大規模調査を実施した。</p> <p>ビワオオウズムシを研究する琵琶湖トラストに所属する女子高校生姉妹を中心に、小学生から生態学者、物理学者、最新鋭のロボット技術者などの大人が一つのチームを作り、水中ドローン、自律型水中ロボットなど世界トップクラスの科学技術を駆使してビワオオウズムシを探した。</p> <p>令和 3 年 7 月に琵琶湖北湖において大規模な湖底探索を実施し、ビワオオウズムシが複数生存することの確認と、個体の大きさや個体数、生息環境等のデータを得ることができた。</p> <p>同時に行われた琵琶湖底の濁度調査により濁度の悪化が顕在化していることも明らかになった。湖底水温も 10 年間で 1℃以上の上昇が確認された。</p>

【審査員特別賞】(副賞 10 万円)

活 動 主 体	戸門 秀雄
活 動 名 称	新潟県魚野川流域を中心とした川の文化の記録
活動の背景・動機	<p>日本の多くに川に堰堤やダムが構築され、川と海を往来して生きる魚種への影響は甚大である。平野部の多くの川が直線的な流路に改修され、カワウや外来魚による在来魚の食害も深刻で、個性豊かな日本の川は姿を消そうとしている。</p> <p>豊富な雪解け水の流れる魚野川は多彩な魚種に恵まれ、特徴的な魚食文化と漁り(すなどり)の伝承など“川の文化”に溢れているが、その担い手は鬼籍に入られ記憶と記録のための時間はもう残されていない。</p>
活 動 の 概 要	<p>半世紀にわたり東日本各地の溪流を訪ね歩き、職漁師の暮らし・漁法・漁具を記録してきた。なかでも新潟県の魚野川流域には昭和 49 年 1 月から45年間にわたり通い続け、様々な魚の漁法や漁具、食べ方、川にまつわる伝承などを記録してきた。</p> <p>令和 3 年 1 月に上梓された「川漁 越後魚野川の伝統漁と釣り」はその集大成である。現存する漁法については現場を取材し、失われた漁法については往時を知る古老から話を聞いた。</p> <p>関連する著書が多数ある。</p>

【審査員特別賞】(副賞 10 万円)

活 動 主 体	理水化学株式会社
活 動 名 称	災害被災地域における水道施設の早期復旧活動
活動の背景・動機	<p>近年、地球温暖化の影響が顕在化し、台風の大型化や集中豪雨の頻発化により水道施設が物理的な被害を受ける事例が発生している。</p> <p>自然災害により水道施設の被災は発生するとの考えのもと、災害時において早期に復旧活動を実施できるよう体制を構築しておく必要がある。</p> <p>断水の長期化は飲料水の不足のほか、生活環境への影響や被災地の復興活動の遅れにも直結するため、災害時において水道施設の復旧は緊急性が求められるものである。</p>
活 動 の 概 要	<p>災害時に早急な施設復旧と水道水の供給再開により、被災地の住民の生命維持に寄与することが水道施設の専門企業としてのCSRとして考え、復旧に必要な資機材の提供や技術者の派遣活動を行っている。</p> <p>社内での資機材備蓄と平常時からの全国の水道事業体との連携強化を進めている。これらにより、以下の活動を行ってきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 東日本大震災(平成 23 年 3 月) 3 県 30 以上の市町村で復旧作業を進めた。資機材は、備蓄品のほか、利用可能なものを全国から集めた。 ・ 熊本地震(平成 28 年 4 月) 南阿蘇村の要請を受け、被災地域内で新たに水源を確保し、備蓄品からろ過設備を現地に提供した。 ・ 資機材の備蓄 令和元年に備蓄施設の拡張を実施した。